

埼玉岳連

埼玉県山岳連盟
埼玉岳連報 第31号

発行者 森下 健七郎
発行所 埼玉岳連事務所 村岡正己方
〒340-0211
鷲宮町鷲宮団地1-28-407
編集人 岩井田 正昭
発行部数 1600部



2008.08.19

ダムジャンパルパット (6507M) 登頂：左から鈴木・風間・平野の各隊員

全国総体登山(埼玉) 大会を終えて

埼玉県山岳連盟会長 森下 健七郎

埼玉・奥秩父山塊の地に全国各地から選手監督・役員を迎えて、彩夏到来08埼玉総体・第52回全国高等学校・登山大会が開催されました。

今大会は前2回大会の総括とそこで培ったノウハウを基に、埼玉県山岳連盟の派遣役員は特にアクシデント等の危急時の支援体制確立の部分での役員協力を担って来ましたが、幸い大きなアクシデントや救急車を依頼するような危急出動は有りませんでした。

通常あり得る想定内の離脱パーティーの支援や体調不良選手の処置では概ね迅速・スピーディーに対応出来たと思っております。また、当初から広い天幕場での雷被害を心配していました。本部設置のげんきプラザで、最終日夕方には数日分を纏めたような激しい雷鳴と雨に襲われましたが、既に選手監督が無事にバスにて宿に向かってからでした。(因みに登山行動中の3日間には幸運にも激しい雷雨には襲われませんでした)本当に天候にも恵まれた3日間でした。

こういった形で、全員が無事に下山、閉会式に全員元気な顔を見せてくれた時は、本当に安堵で胸をなで下ろしました。頑張って山を歩き通してくれた選手・監督、全国高体連登山専門部関係役員の皆様、そして登山行動役員・設営役員・支援役員・・・、さらに長い期間、準備作業を続けてきた埼玉高体連登山専門部及びそれを支援援助をしてきた地元秩父市・小鹿野町の関係者の皆様に大きな敬意と感謝の気持ちで一杯です。

大会が大成功裡に終了し本当におめでとございます。この大会に関われた事を大変嬉しく思うと同時に誇りに思います。今回の大会が選手・役員の皆様の大きな思い出の1ページになった事を感じて、挨拶に代えたいと思います。ありがとうございました。

《インターハイ登山大会を終えて》

登山隊長 大石智章
(高体連登山部委員長)

去る8月6日から10日までの5日間にわたり平成20年度全国高等学校総合体育大会登山大会、いわゆるインターハイ登山大会が開催された。

秩父山城の白泰山・両神山・白岩山の3コース、大滝げんきプラザ・両神中学校、大滝中学校の3幕営地を舞台とし、選手・監督計570名、コース隊・設営隊等の行動役員・補助員計300名、式典等の運営役員・補助員計300名、総勢千人を優に超す規模であった。

6日には秩父宮記念市民会館にて開会式。式前には秩父農工科学高校生徒による秩父屋台囃子で歓迎。式後、医療・気象等のペーパーテスト。ただし、前日の監督リーダー会議での計画書提出から審査は始まる。昼食後、A隊(団体男子46チーム)270名、B隊(団体女子38チーム)230名、C隊(種目男子縦走23チーム)170名、D隊(総監督・視察員)40名に別れ、各幕営地へバス移動。A・B・C各隊はこの日からテント泊。設営審査・炊事審査等を行う。一方、競技の中にあつても、参加校間の交流会で互いの郷土や活動などを紹介し合い、親睦をはかる。7日朝より登山行動が始まる。国体縦走競技と違い、各隊の全員が隊列を組んでコースを歩く。その中で体力・歩行技術・地点確認・記録書・マナー・装備審査等がある。9日には競技対象となる全登山行動を終了し、宿舎泊。10日、開会式と同じ秩父宮記念市民会館にて閉会式。式前には小鹿野高校を中心とする高校生による小鹿野歌

舞伎の披露。そして閉会式で結果発表、次年度開催の兵庫県へ大会旗等を引き継いだ。

本大会は天候に恵まれ、大きな事故もなく、無事に終了することが出来た。大会前も大会中も連日雷注意報や警報が発令されたが、奇跡的に一度も雨具を出すことのない登山行動であった。また、事前の役員研修会等でリタイアする選手への対応を細かく検討したが、幸いその数も少なく、ほとんどの参加校が全コースを歩き切った。

埼玉岳連からは28名の方々に協力頂いた。村岡理事長はじめ26名の方々には、体調不良の選手や危急時に対応して頂く各コース等及び幕営地の支援隊として、また、大会名誉会長である田中前会長にも地元埼玉県の浦和山岳会会長として技術顧問を、森下会長には競技副委員長として現地本部に詰めて頂いた。支援隊としての本格的な出番は無かったものの、事前の机上講習会では危急時搬出法の講習をして頂き、多くの装備を貸して頂き、想定される事態に備えて様々な準備を重ね大会に臨んで頂いた。本大会中には細かい配慮をして頂き、縁の下から大会を支えて頂いた。岳連の方々のご協力は本当に心強いものでした。深く深く感謝申し上げます。

さて、10月末には大会報告書が完成する。審査内容や各担当の記録等もあるが、是非とも高校生である参加選手達の感想文を読んで頂きたい。競技登山一筋に頑張る者、山を楽しみ全国の同じ山岳部員と交流を深めようとする者と様々だが、彼らは今後の日本の山岳界に関わる者達である。一方、この大会規模ではより発展的な登山は期待できない。クライミングや積雪期、海外などへ子供達の目を向けることも並行して考えたい。あるいは、今後の登山環境、ひいては地球規模の環境のことなども。大会の無事終了をもってまずはよしとすべきであろうが、

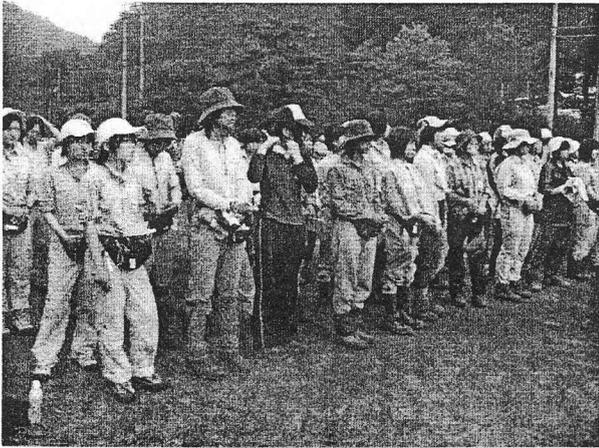
検討すべき課題は内にも外にも山積みである。今後の登山活動を通じて注視していきたい。

競技結果

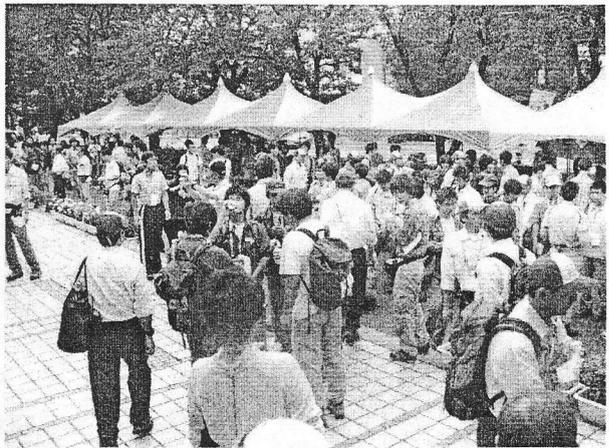
- A隊優勝：広島県、広島学院高校、松山高校23位
- B隊優勝：三重県、四日市南高校、朝霞高校32位
- C隊優勝：福島県、安達高校、熊谷高校19位



秩父宮記念市民会館・表彰式会場で



大滝中ゲラントにB隊到着



市民会館前・熱気あふれる受付



大滝中学校・設営隊集合
木島隊長（中段右）他の皆さんと



A隊・テント設営に汗を出す

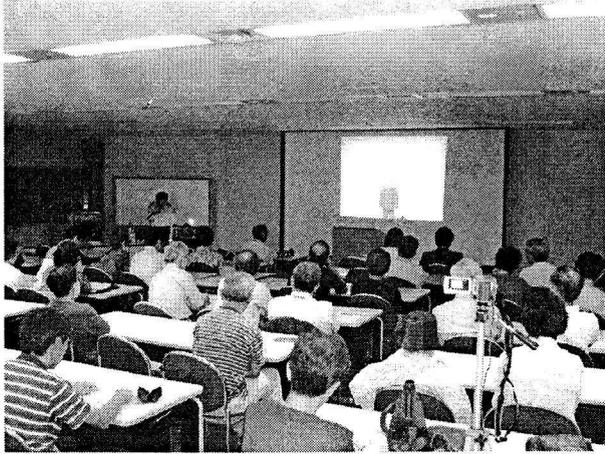
《大山光一氏講演会》報告

去る6月24日（火）、大宮ソニックシティにおきまして海外登山委員会の第6回講演会が開催されました。今回は埼玉県東松山市在住で昨年5月チョモランマへ登頂し世界七大陸最高峰登頂を達成された大山光一氏をお招きし、「世界七大陸最高峰登頂と10年計画」と題した御講演をいただきました。

大山氏はかつて埼玉県山岳連盟隊で1973年の北米大陸・マッキンレー峰（6194m）、1974年のカラコルムヒマラヤ・ハラモシュ峰（7406m）にも遠征された、いわば我々の大先輩にあたる方です。その後しばらく山からは遠ざかっていらつしやいましたが、50歳代を機に一念発起され10年間の世界七大陸最高峰登頂を計画されこの度見事その夢を達成されました。家庭もあり大企業に勤める会社員でもありながら、時には単独でも海外遠征を実践し今回の偉業を達成された、その生のお話を聞かせていただけたらいいん素晴らしい機会となりました。

当日は70数名を超える方々にお集まりいただき、たいへん盛況な会となりました。スライド写真を交えた御講演はたいへん分かりやすい内容で、会場を訪れた皆様にも好評を博し、高名なアルピニストの雲の上のような話より、我々と同じような環境から準備と努力を重ね、夢や目標に進んでいく姿勢に多くの方が共感されたようです。

特に我々が注目したのは、大山氏が漠然と七大陸最高峰を目指したのではなく、10年間という期間の中できちんと課題を明確にし、計画を実践されたということです。周到な準備と綿密な計算に基づく行動力は非常に参考になりました。スポンサーもない中で資金調達や3度目でやっと登頂したエルブルースなど苦勞話にも多くの関心が集まっていた



プロジェクターを駆使して説明される大山光一さん

ようです。もつとも私自身が一番驚いたのは大山氏が日常で特にトレーニングをしていないというお話しでした。たいした結果が出ないのに下界で駆けずり回っている自分がなんとも虚しく感じられ、まだまだ勉強が足りないかと深く自省させられました。最後に大山氏にお願いして書いていただいた色紙には「夢をあきらめない」というお言葉をいただきました。

今回の貴重なお話しを今後の我々の活動に生かしながら、決してあきらめない強いモチベーションが何よりも大事だということを肝に銘じて更なる高みを目指していきたいと思えます。

海外登山委員長 天野賢一

《スダルシヤンパルバット登頂記録》

平成20年8月9日〜24日

2008スダルシヤンパルバット登山隊

登山隊長 山際登志夫

多くの皆さんからご助言やご支援を頂いた「2008スダルシヤン・パルバット登山隊」は3名の登頂という成果を得て全員無事に帰国しましたので報告させていただきます。

〈計画と準備〉

当初の計画立案は昨年5月にガンゴトリからシプリンBC（タポバン）に行つた時に現地ガイドに周辺で6000m級短期でも登れる山としてSAIFE山（6166m）を進められて検討していた。

今年に入りインド登山財団（DME）が114山を開放して申請などの簡略化や通常は登山専用Xビザが必要なが観光ビザでOKとなった。

その中にSAIFEの隣の「スダルシヤン・パルバット6507m」がありこの山に変更を2月頃に決定し具体的な計画立案となった。

最大の課題は夏休みの2週間で登頂可能かどうかであった。通常はデリーから登山口のガンゴトリまで3泊で移動する行程を1泊半でチャーター車を手配して移動することで、何とか登頂が見えてくる日程を計画した。

その後、準備会を数回重ねて食料・装備・医療面を中心に計画を仕上げて装備点検会も行った。

最終的には隊員は日本から5名、インドから2名、韓国から1名の8名となった。富士山頂上で宿泊しての高度順化訓練は回を重ね、最終回は出発の1週間前に実施した。

また壮行会は大宮で盛大に開催して頂上決意を新たにした。緊急用のGPS衛星携帯電話はインドで

は手配が難しいとの情報で、日本でレンタルして持込むことにした。

〈インド現地での準備〉

インド登山財団（DME）と現地ウトランチャル州への登山許可の取得はインド在住の2隊員（宮澤副隊長・RAJEEV 隊員）が担当した。手続き上ではインド入国後に直ぐにIMFへの隊長が挨拶と説明が必要などところを「宮澤副隊長への委託書」をIMFに送付して代行を許可してもらいデリーでの滞在時間を短縮した。

またデリーの日本大使館への挨拶と緊急時のヘリコプター手配も宮澤副隊長にお願いした。隊員が加入したIH I保険（デンマークの海外保険で高所登山もカバーされる）証のコピーを提出して了解を得ること出来た。また連絡官（リエゾン・オフィサー）もRAJEEV 隊員（インド登山学校上級卒業生）が最終的には兼任させてもらえることになった。途中のウツタルカシでIMFからの登山許可書類を持って現地ウトランチャル州の州政府4機関に申請・届けをするのは半日費やしてRAJEEV 隊員が行った。また現地で「ガス缶」や食料なども現地調達をして日本からの物資を最小にするように図った。

登山のエージェントの選定・交渉はコストやガイドの経験などから現地のウツタルカシに事務所を置く「MOUNT SUPPORT社」に依頼することにした。追加の登山ガイドとしてはRAJEEV 隊員のインド登山学校時代の友人（BOKさん）をアッサムから呼び寄せ登頂の強力なガイドとなった。

〈日程〉

8月9日成田発時は個人重量制限30kg以内（特別申請要）で収めて全員無事にデリーに到着。

その夜はインド料理専門店夕食。韓国からの辛隊員をデリー空港に迎えて全隊員が宮澤邸にそろった。

10日朝5時にはデリーを出てウツタルカシまでの560kmをチャータしたマイクロバスで15時間掛り移動した。夜に到着後エージェント(登山旅行社)に挨拶・打合わせをした。

11日はウトランチャル州の4行政関連機(州の行政府・警察・消防・登山学校)に申請・届けを行い予定より半日遅れで登山口のガンゴトリに到着しガンゴトリ泊となった。

〈登山活動〉

12日はいよいよガンゴトリからゴモックまでのキャラバンとなりゴモックで最初のテント泊となった。キャラバン隊は隊員8名・ガイド2名・コック1名・コック助手2名・ハイポータ3名・ローポータ28名・ロバ4頭の構成。

13日は朝5時に出て11時頃によくBC(4600m)に入った。午後は5000mくらいまで偵察を兼ねて高度順化を図ったBCでの食事は連日ベジタリアン(菜食)となった。コックに確認すると聖地なので肉や卵・玉ねぎにんじくは持ち込みは禁止されているからの回答で焼きソバ・焼き飯・スープとインドの豆粉の天ぷらの繰り返しとなった。14日早朝に宮沢副隊長からテントに同宿の辛隊員の様子がおかしいとの連絡。声を掛けても起きなく、応答が悪く、反応も悪い。顔も浮腫み高山病(脳浮腫)と判断。デカドロンとダイアモックスを投薬して早々に宮沢副隊長・RAJEEVとポータ1名が伴いゴジュバサまで10000mを下山した。宮澤・辛隊員はその後BCには戻らなかつた。この日、鈴木隊員は体調不良でBC滞在となりC1(5300m)建設は山際・風間・平野とガイド・ハイポータで行った。しかし、ガイドのラクシュマンは前日に足を捻挫してBCで静養となりスタートからトラブルが続いた日であった。BCは内野副隊長が今後も

滞在して指示を出してもらおうことになった。

15日は鈴木も加わりアタック隊4名(山際・平野・風間・鈴木)がそろった。この日はC1に上がりテント泊。高度順化のために高度を上げる時は100m/1時間のペースを守ってガイドらの早いペースの後をゆっくりと登った。ラジープ隊員はこの日BCに戻った。

16日はC1からC2は雪の斜面を氷河に沿い登り、雪上にC2建設を行いC1まで下山した。ラジープ隊員はこの日にC1に登って来た。

17日はC2(8800m)に上がり泊。この間は隊員・ガイド共に高山病の症状も無く食欲も落ちなく体調で順調。

18日は今回のシユダルシャン登攀核心部のアイスと雪の70度程度の傾斜の長さ150m位の壁にFIXロープ工作を行った。アイスクライミングの終了点の6000mまでアタック隊4名も上がり高度順化した。彼らが持ち込んだFIXロープは「虎ロ―プ」で滑りが悪く苦労した。

19日はいよいよ唯一のアタック日で予備日の無い背水の陣であった。21日にはBCに下山のためにポータの手配も終え、ガンゴトリから移動のジープやデリーまでのバスの手配もGPS携帯電話で手配を済ませた。RAJEEV 隊員はリエゾンとしての役割から、非常時に備えて頂上アタックに参加せずにC2に留まるとの判断をしていた。

夜11時30分に起床し食事。ガイドの2人が起きて来なくてようやく2時にテントを出て登攀開始。

最初のアイスクライムと雪壁登攀は行動毎に大きく息を数回しないと次に行動が出来ない。ようやく雪の稜線に出たころには太陽が輝き初めての青空の向こうに初めて頂上が見えた。

この後に続く岩稜帯はかなり崩壊が激しく落石が

FIXロープで誘発して起き隊員めがけて降ってくる。ここを越えると傾斜のある雪稜が続く、その後頂上までの広い雪原登攀になる。この頃、山際のペースが落ちてきて高山病(肺水腫)の症状が出てきた。これ以上の無理は危険と判断して6300m付近で断念しそこから単独で下山。残る3名(風間・鈴木・平野)とガイド2名で頂上に向い15時20分登頂した。C1には暗くなってから帰還したが、5800mで3泊目となった。山際の容態は悪かったが、ダイアモックスとバイアグラを投薬してから少し落ち着いてきたので、夜間にクレバス帯の氷河上を降りるより明朝に下山する方が良いと判断した。BCは連日の雨に悩まされ内野副隊長は苦労されたが、この日はBCも好天に恵まれ内野副隊長はC1まで往復し登頂隊に登るのを見ていた。

〈下山〉

20日にC2、C1を撤収しながらBCまで下山しBC隊の歓迎を受けた。この日にローポータ11名がBCに登ってきて下山のキャラバン隊がそろった。ローポータは「ダブル(二倍の荷物を持つ)」希望が多く人数を減らした。

21日はゴモックまで氷河モレーンの土砂と岩の悪路を下った。インドメンバーはガンジス河源流のゴモックの水を汲んでいた。ゴモックはインドの聖地で氷河末端から流れ出る水はインドでは最高のお土産となり、冠婚葬祭などにはこの水を少しづつ飲むそうである。

ゴモックからガンゴトリまでは18kmのトレッキングルートになるが、単調なルートは疲れた体にはきつい下山路となった。ガンゴトリには午後2時過ぎに到着した。

〈ウツタルカシまでのアドベンチャー〉

この日にウツタルカシまで94km移動しないと予

定通りにはデリーに戻れないので、雨の中を早々に四輪駆動車に分乗して出発。例年は8月中旬には明けるモンsoon明けが今年は遅れていて雨模様の日々が続き、雨は道路山側から落石や倒木を流し、何度かドライバーが先に行くのを拒否する場面や落石から逃げる場面もあった。道路をまたぐ倒木の時は隊員の多くは帰国航空券をあきらめたが1kmほど先のトンネル工事の重機の出勤を交渉して倒木を排除してもらって切り抜け、夜のウツタルカシに運よく到着できた。この時期は道路崩壊も時々あり先を下りた辛・宮澤隊員は3日間不通後にトラックで移動した。ウツタルカシでは翌日の早朝移動に備えて、夜にエージェントに費用支払いを済ませた。

〈デリー経由帰国まで〉

22日は4時に起床してマイクロバスに積み込み5時発で、デリーまでの560kmを揺られて宮澤邸に戻った。この夜は久しぶりの日本食とビールで隊の成功を祝った。

23日はデリー市内の世界遺産観光や買い物を楽しみ、IMFに見学と挨拶で訪問した。夜には機内の人となり、熟睡して成田に帰国した。

24日早朝に成田空港に到着。天野会長・小茂田さん・岡野さんの出迎えを受け、朝食を取りながら簡単に報告してから車に分乗して帰宅した。

参考：今回の一人当たりの費用は、登山許可申請費が6万5千円とエージェント費、移動費、ホテル費、食事代など総額で800USD、JAL航空券17万円であった。

※ 編集・注

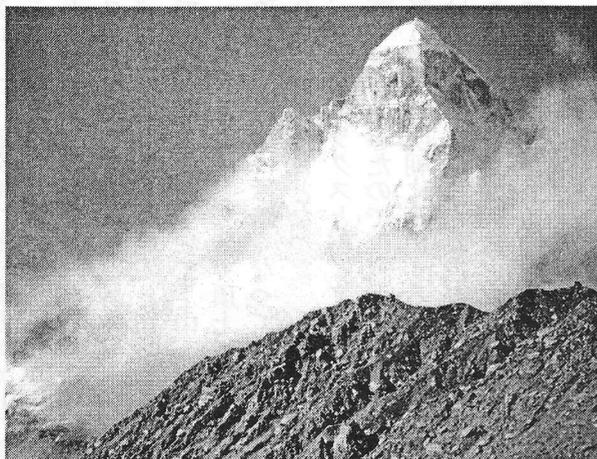
本報告は速報版として発表されるものです。公式には近日発行される仮称『2008スダルシヤンパルバット報告書』の併読お願いします。



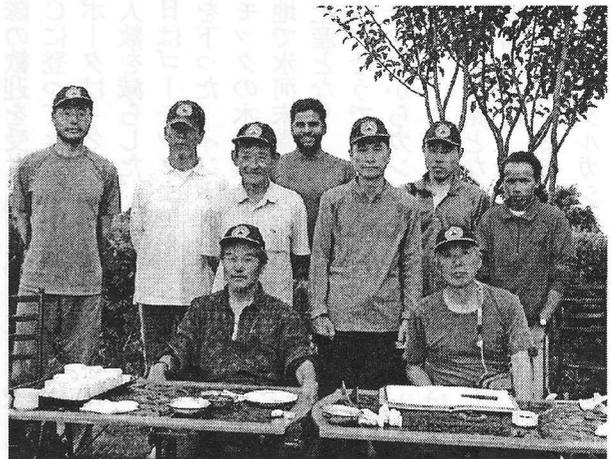
壮行会で山際隊長から隊員紹介
左から風間、鈴木、内野、辛、平野、山際



出発前の装備、食料、医療品の仕分け点検作業



ゴムックBC(4600M)から怪峰ツリンをみる



ヒルトップホテルで前列の山際隊長、
内野副隊長を囲む全メンバー

特別寄稿

『新疆ウイグル自治区とアルタイ、シルクロードの旅』

奥武蔵ワンダーフォーゲル・新井宏司

杭州より、6000キロ離れたウイグル自治区ウルムチ市に蘭州を経由してはいりました。

世界で最も内陸に位置する都市でウルムチ市は中国最大の省（日本での県庁所在地に当たる）政治、経済、文化の中心となっていて、ここで人口は百八十五万人で漢族、ウイグル族、モンゴル族、回族など四十二の民族が暮らしている、周囲に万年雪を頂くアルタイ山脈や崑崙山脈の高峰が連なるため雪解け水を水源とする河川が多く水不足とは縁遠い、市内では、ウイグル族の商店と云っても露店が所狭しと並び、主食のナン、羊肉、ブドウ、西瓜、ハミ瓜、桃、等が山ほど積まれシシカバブ羊の肉の串焼き、香辛料の香りも漂う場所でもありました。

観光地 天池

ウルムチ市から、約120キロ離れた所にある天池を目指したが、砂利道の悪路が続き予想以上の時間を費やした、天池はモンゴル語で「聖なる山」を意味するボコダ峰五千四百四十五メートルの中腹にあり、長さ三千四百メートル、最大巾は千五百メートルで最深部は百メートルにも達するとか。エメラルドグリーンの湖水と山を中心として青と緑のコントラストは非常に美しく中国のスイスとも呼ばれている、この一帯は遊牧民民族カザス族の居住エリアでもある。新疆ウイグル自治区の面積は日本の四倍あり、北京との時差は二時間あります。シルクロードとは離れて別に、ロシア国境のアルタイを選んだ魅力の一つの理由は二百万年前の自然がそのまま手付かず残っている、フイヨル

ド湖、カナス湖があり中国最後の秘境と考え、まずこの目で確認して起きたかったからです。

ロシア帝国の圧制から逃れ、この地にたどり着いたといわれる、トワ人（中国ではまだ独立した民族として承認されていない）民族が暮らす村人とも合える機会があるかもしれないと望んでいた。

ウルムチ空港からアルタイ空港までは、約五百キロ（羽田、札幌間に相当する）ウルムチを離れた七三七型機はジュンガル盆地の上空を飛び、一時間程でアルタイ空港に着陸した、この路線はまだ北京とウルムチを結ぶ二線のみが就航している、ローカル空港なので観光客は少ない場所でもある、アルタイは人口二十三万人、東を將軍山、西を駱駝峰に挟まれた山あいの小さな町であり、カザフ族が多く彼らの多くは草原で悠々自適の遊牧民生活を送っている。

モンゴル語で「美しい神秘の地」を意味する、カナス湖はアルタイ山脈最高峰のクイトウン山四千三百五十六メートルの麓にある、フイヨルド湖でアルタイから、カナス自然保護景観区にある、二百万年前の氷河の侵食によって造られた湖で、季節や天候によって湖水を変色させるのでも有名である、エメラルドグリーンや灰緑色、緑色を帯びた乳白色に見えたりするこれは氷河に含まれる鉱物が水に溶けることによつて起こる現象で、氷河期から今日まで自然がそのまま手付かずに残された非常に珍しく本当に美しい場所でありました。

アルタイ空港からカシユガルへ

アルタイ空港を離陸したボーイング七三七機は、高度一万メートルで、天山山脈の最高峰ハンテングリ六千九百九十五メートル、やボベタ峰七千四百三十九メートルの連なる山々を脚下に飛行を続けて、ウイグル自治区第二の都市、市の中心部で西域の南道と天山南道が交差する、東西文明の交差点であり、シルクロードの買

易とともに栄えてきた、カシユガルに着いた、中央アジアと中国を結ぶ要塞として多くの民族、文化が行き交った町でもある、カシユガルと云う名前の由来は（ペルシャ語、チュルク語）が語源であり「玉の集まる所」。カシユガルの人口は三十五万でイスラム教徒ウイグル族が多数を占めているが年々漢族の移住が増えている。

エイテイガル寺院

市の中心にあるエイテイガル寺院は新疆最大のイスラム寺院で、千四百三十三年に創建された、一日五回の礼拝が行われる、イスラム教の祭日、グルバン節やローズ節には、二万人から三万人もの信者が集まる、カシユガルからさらに三百四十四号線を二百キロ進むと、パミール高原に入る、入口は軍隊の管理下に置かれ、遮断機が設けられ検問が行われる。

カラクリ湖

カラクリ湖とはウイグル語で「黒い湖」と云う意味、湖面は陽光の加減により銀色や青色に変わる、標高三千六十六メートルにあり、背影に、コンガル峰七千六百四十九メートル、ムスターグ・アタ峰七千四百五十六メートルに連なる山々は、五千メートル級の無名峰である、この山々の裾野を散策して引き返してきた。

カシユガルより天山南路敦煌まで

カシユガルを出発してオアシス沿いに約一時間、タムリ盆地タクラマカン砂漠の西端に着いた、ここからは砂漠のオアシス沿いの町、アクス、クチャ、コルラ、トルファン、ハミ、敦煌へと砂漠の道を千二百キロから千三百キロ走り抜け灼熱のトルファン盆地を通過して敦煌まで天山南路の旅は続く。

シルクロード（絹の道）

アクス広大なユーラシア大陸の東西を結ぶ道は古くからあったが、紀元前から後にかけて西はローマ帝国、東は漢帝国が隆盛を誇っていた頃、漢民族は

良馬を、ローマ人は中国の絹を求めて交易が始まり、ルートは河西回廊の西の終点、敦煌から天 Shan 山脈の南を行く、天 Shan 南路と崑崙山脈の北麓を通る二つのルートがありこれらは、パミール高原で合流する。その他天 Shan 山脈の北麓を通る天 Shan 北路もあった。

豆、絹の他ブドウ、ガラス、紙等も交易に使用されたばかりでなく、仏教、イスラム教、キリスト教等の宋教も伝えた、又思想、文化、芸術、科学等あらゆる分野の交流の道でもあった。

八世紀唐朝の弱体化により西域は荒廃しシルクロードはその後役割を「海上の道に」譲った。

《アクス》

アクスはウイグル語で「白い水」を意味する、アクスに人口五十七万人、後漢時代西域三十六国の一つに姑墨国がこの地に栄えたがその後三国時代、龜茲国の支配下に置かれてからは各遊牧民族と中国王朝に統治された。

《スバシ故城》

スバシ故城はチエルターグ山の南麓に広がる仏教遺跡で、玄奘が記した「大唐西域記」に登場するマーミューチャリヤ寺だと考えられて唐代には龜茲国最大の寺院であった。

《クチャ》

天 Shan 山脈の南麓に位置するクチャは、タムリ盆地の北側の海拔千以上の高原に開けた天 Shan 南路の古くからの要塞である、古くは龜茲国と呼ばれ西域経済の拠点として栄えた、九世紀初めには高昌国の支配下となりウイグル族が定着、清代からクチャと呼ばれるようになった、名僧、鳩摩羅什の故郷としても名高い彼は呂光と云う將軍によって中原に連れて行かれ多くの経典を訳し仏教界に多大な影響を与えた、高僧として名高いクラマジバ（中国名は鳩摩羅什）の母は龜茲国の王族だった、さらに玄奘もインドに

向かう途中この地に立ち寄っている。

人口は四十一万人天 Shan 山脈を突っ切ってウルホヤアルタイ等の北疆よりのカシユガル等南疆エリアを結ぶ街道の要塞でもあった。

《キヂル千仏洞》

龜茲王国の貴重な仏教、文化遺跡でムサデイ渓谷の北岸海拔千三百以上の断崖部分にあり造営開始は敦煌の莫高窟より早い後漢末期と云われている。

《ズルガハ千仏洞》

天 Shan 山脈系のひとつである、塩水渓谷は玄奘がインドに向かう途中に通ったところの渓谷の岸壁や谷上にある、漢代から唐代にかけて造形した石窟群である。

アクスからタクマラカン砂漠を三百七十キロ以上十時間かけてクチャに着いたがまだまだ長い、クチャからコルラまでは約四百キロ以上ありオアシス沿いに進むことになる。カシユガルからでは七日間かけて約千キロ以上タクマラカン砂漠を走りコルラに入れば砂漠の戦いも終わりに近づくと思う。

《コルラ》

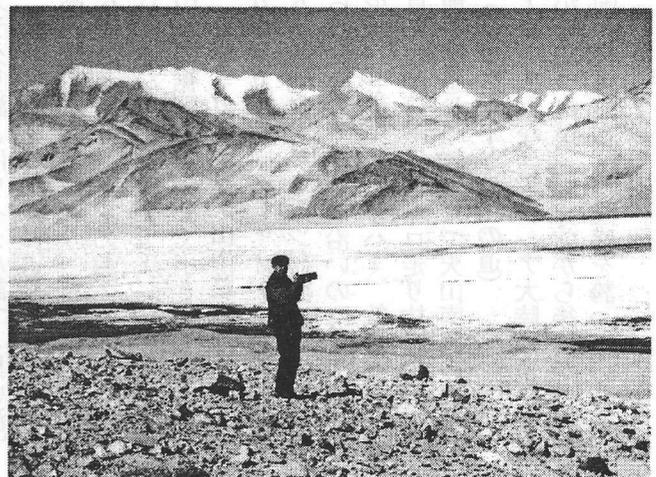
ウイグル自治区の中でも最大の面積を持ち人口四十二万人、天 Shan 山脈の何麓に位置しタムリ盆地の北縁にあり古くからタクマラカン砂漠周辺に点在したオアシス国家を結ぶ、シルクロードの要衝として重視されていた、現在でも北疆や南疆と結ぶ重要な都市である。 次号に続く

※編集・注

特別寄稿戴いた『新疆ウイグル自治区とアルタイ、シルクロードの旅』は紙面の都合により二回に分けて掲載いたします。前編はウルムチからコルラまで、次回は鉄門関から敦煌まで掲載します。ご期待ください。



タクラマカン砂漠と砂漠のタシ「駱駝」



カラクリ湖とムスターゲアータ、コングールの山々

《埼玉県山岳連盟・常任理事会》

開催：平成20年8月21日鴻巣高校武道館 午後7時30分～9時10分

出席者：森下、福田、石倉、柳原、小茂田、岩崎、天野、長谷川、土屋、加藤、野村、鎌田、高岡、大石、村岡（議事進行）

次回の会議平成20年9月16日
鴻巣高校武道館 午後7時30分（注意・第2火曜日から変更となります）

I・会長挨拶

高校総体は、皆様の協力のもと大成功に終われたと感じています。ありがとうございました。話は変わりますが、事務局長の大倉氏が、ここに来て体調が思わしくなく事務局の業務を遂行することが難しいと状況となりました。今日の議題の中で事務局の人事について検討をしたいと考えております。よろしく願います。

II・報告

① 高校総体・8月6～9日

（秩父・小鹿野 白岩、白泰、両神）

大会最終日の9日は、夕方雷雨に合ったが全体的に天候に恵まれ大きな事故がなく無事に終わることができました。非常に幸運な大会だったと感じています。今回、先催県にいろいろな情報を頂き役に立ったことを考えると、後催県にもいろいろな生の情報を提供したいと考えています。皆さんからも気がついた点がありましたら情報を頂ければと思います。

団体男子（A隊） 1位 広島県（広島学院）

埼玉 23位（松山高校）

団体女子（B隊） 1位 三重県（四日市南高校）

埼玉 32位（朝霞高校）

種目男子（C隊） 1位 福島県（安達高校）

埼玉 19位（熊谷高校）

② 関東ブロ・7月26～27日

（山梨小瀬スポーツ公園）

少年男子 小峰直城、高山悠樹（坂戸高校）
4位 ボルダールの実力差で本国体逃す
少年女子 生井沢千佳（坂戸高校）、海老沼かおり（庄和高校） 5位 来年以降期待
成年女子 門間希美（立教大）、川端彰子（東横学園大）、3位

ボルダールの逆転で大分出場を得る

※役員としてボルダール主任審判 村岡、総務員 長谷川を派遣

ボルダール採用初年度として、審判の力量にバラツキがあるため前々日からシミュレーションによる勉強会を実施。それでも1件（両手保持の解釈）クレーム発生。

III・連絡

① 9月以降行事

9月20～21日 和名倉山

植林用地の整備&登山、参加費2,000円（岳連未加盟3,000円）

申込み 埼玉県山岳連盟自然保護委員長

岩崎繁夫 (tel/fax 048-442-0833)

9月21日・クライミング講習会

加須市クライミングウォール（アルパインクライマー5.11を目指せ第2回）

申込み 埼玉県山岳連盟クライミング委員会 土屋正昭 (tel/fax 0480-62-7152)

参加費1,000円（前回参加者は免除）

11月1～2日・自然保護総会（大阪）

申込み 岩崎自然保護委員長まで

10月25日・指導者研修会（福島）野村指導委員長参加

9月末～11月・高体連地区新人大会開催

② 会計報告

日山協への負担金59団体×5,000円+100,000分納入するが、共済、資格等の還付金により差し引き3万7730円の支出となる。

III・事務局長人事

大倉事務局長の代替え人事として前事務局長の加藤氏（現会計）が、今年度の残りの期間を引き受けていただくことを了承。来年度以降については、新事務局長を検討。以上

《スダルシャン・パルバット登山隊》

報告会・祝賀会の御案内

遠峰山岳会 代表 天野賢一

拝啓 初秋の候皆様におかれましては益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

さて去る8月、インド・スダルシャンパルバット峰(6,507m)に挑みました遠征隊は8月19日に見事登頂を果たし、8月24日全員無事帰国致しました。これもひとえに皆様の御支援の賜物と、あらためて感謝申し上げます。

つきましては下記の通り、遠征隊の報告会と登頂の祝賀会を実施致します。お忙しいところではありますが、御出席戴きたく御案内申し上げます。敬具

記

日時：平成20年10月26日（日）14:00～

会場：さいたま市民会館うらわ・5階ホール

会費：5000円

参加ご希望の方は左記あて連絡をお願いします。

連絡先：天野 賢一 TEL&FAX:048-298-2082

E-mail 《evergreen2000@nifty.com》

会場の都合により10月10日までにご連絡ください。

群馬県山岳連盟より左記の通り新役員が発表
されましたので、ご案内致します。(広報委)

平成20年度 群馬県山岳連盟役員

- 会長 : 羽野順一(境)
- 副会長 : 角田二三男(高体連)、八木原園明(ミヤマ)
- 監事 : 水野金太郎(沼田)、藤沼隆男(大間々)
- 理事長 : 佐藤光由(ミヤマ)
- 副理事長 : 小林達也(高体連)
- 会計 : 長谷川勇(中之条)
- 総務委員会 : 女屋等志(ミヤマ)、千明政彦(ミヤマ)
- 編集委員会 : 岡安茂能(高体連)
- 福田純一(大間々)、須永俊介(桐生)
- 遭難対策委員会 : 小暮文彦(境)、清水裕干(むすび)、梁瀬佐市(沼田)
- 登山指導委員会 : 吉田直人(境)、久保田一美(太田)、高橋守男(高体連)、角田守(前橋)、阿部源(ミヤマ)
- 競技委員会 : 角田二三男(高体連)、赤松久宇(太田)、堀越利通(登高会)、茂木稔(独峰)、松田龍彦(前橋)、川島勉(高体連)、齊藤健(登高会)、栢植求(ウオールストリート)
- 海外登山委員会 : 劍持典之(境)、田島崇行(登高会)、飯塚敏宏(ミヤマ)
- 自然保護委員会 : 小泉俊夫(前橋)、寺内正明(前高OB)、斎藤長作(松井田)、須田久男(桐生)
- 事業委員会 : 見城正造(沼田)
- 特別会員 : 野口勤(県観光物産課長)、木村雅治(県スポーツ健康課長)
- 理事 : 桑原正明(吾妻)、小林利之(安中)

池澤常平(青空)、須田栄一(むすび)、永井伸之(岳想会)、串橋卓馬(信越化学)、中島正二(水上)、黒川篤(高崎)、星野俊充(境)、原口慎太郎(太田)、劍持英司(中之条)、豊野則夫(岩遊)、小和田和貞(ミヤマ)、山越稔雄(登高会)、野口勝広(松井田)、町田幸男(シグマ)、対比地昇(高体連)、松村健司(富士重工)

◎ 常任理事・委員長 ○ 常任理事・副委員長

速 報

第111回 JOCCジュニアオリンピックカップ
富山県南砺市城端 桜ヶ池クライミングセンター
8月15日〜17日
参加選手・男子157名/女子101名
埼玉選手の活躍

門間希美 ・立教大(ジュニア2位)
是永つぐみ・東京家政大付属中(ユースB2位)
生井沢知佳・坂戸(ユースA2位)
細田 匠 ・久喜工(ユースA8位)
高山悠樹 ・坂戸(ジュニア5位)
弓田溪介 ・小松原(ユースA2位)
山崎拓也 ・庄和(ユースA2位)
宮尾秀平 ・庄和(ユースA2位)
尾上彩 ・川口南中(アンダーユースB優勝)
是永敬一郎・京北中(アンダーユースB7位)
青木大輔 ・加須西中(アンダーユースB2位)

準決勝以上の選手です



【事務局便り】お知らせ

菅野修一さん・享年51歳 9月19日逝去
川口市岳連 グループ・ド・ピオレ代表
埼玉県山岳連盟 元事務局長
埼玉県山岳連盟 元海外登山委員
生前のご活躍を偲び心からお悔やみ申し
上げます
埼玉県山岳連盟 一同

《各会情報誌発行の案内》

今号ははちきれそうな情報があり、紙面の都合により3回目となる情報誌案内は次号にて再度、案内いたします。投稿戴いた会に御礼申し上げます。また各会で発行されている月報や年報を是非一部送付ください。到着順に紹介していきたいと思います。

広報委員会

【ひとりごと】

季節外れの夏休みを9月に入り小梨平にテント持参でのんびりと数日間遊ぶ、天候に恵まれ、焼岳、西穂高、徳本峠を往復。さすがに標高もあり、色付始めたナナカマドや霜まで見る事ができた、下界ではまだまだ半袖だと言っている。

レンジャーの方の話に寄ると、最近小梨平に熊が出るのでできれば管理小屋の周辺で幕を張ってほしいといわれ早速移動。間もなく近づく冬に備えて冬眠の食料調達に忙しいらしい。不要なトラブルは避けたいので管理小屋の隣に移動、風呂も近いし、問題ない。熊が里に下りるのも温暖化の一因なのか。

@miwaida